

ワシントン情報、裏 Version  
2005年5月9日  
竹中 正治  
「映画に見る文明の衝突：“Kingdom of Heaven”」



【挑戦的なテーマ：“Crusade”】<sup>1</sup>

昨年、この映画の予告編を見た時から気になっていた。アフガニスタン、イラク、中東での戦争が続き、米国（あるいは西側諸国）とイスラム圏諸国との間の緊張・軋轢が高まった今の時代環境の中で、あえてエルサレムを舞台にした十字軍の史実を背景に映画を製作しようと言うのである。かなり挑戦的な試みである。下手をすると大変な「超歴史大駄作」になるのではないかとも思った。ブッシュ大統領でさえ、対テロ戦争の文脈の中で“Crusade（十字軍）”と「失言」し、批判の集中砲火を浴びた今日である。「十字軍」という題材をこの映画はどう仕立て上げるのか？

この映画のクライマックスは、アラハディーン（アラディン）率いるイスラムの大軍と、エルサレムに籠城するキリスト教徒らの戦い（攻城・籠城戦）である。同じように籠城戦をクライマックスにした2つのハリウッドの「歴史大作」が私の脳裏に浮かんだ。いずれもチャールトン・ヘストン主演の映画である。

【対中国人籠城戦：「北京の55日」】

まずひとつは1963年の「北京の55日」である。時は1900年、欧米列強に蹂躪される中国で、外国人排撃を掲げた義和団運動が起こる。北京で外人居留区に攻め込もうとする義和団の大軍を相手にアメリカ海兵隊の少佐（役、ヘストン）が、僅か数百人の欧米人混成部隊で55日間の籠城戦を展開するストーリーである。55日間の籠城戦の後、本国からの救援大部隊が続々と到着し、義和団は蹴散らされる。列強の軍隊が威風堂々入城するシーンが最後の「見せ場」になっている。

私はこの映画を中学生の時に、TVの日曜洋画劇場で見て、「一体なんだこれは?!」と感じた。とにかくもの凄い「欧米礼賛、中国蔑視」が横溢しているのである。欧米の登場人物は個性豊かに描かれている。一方、中国の義和団は、暴力的で野蛮な烏合の衆として没个性的に描かれている。アメリカ人主人公と共に戦う日本軍駐留部隊の隊長役として伊丹十三が少しだけ登場する。ラストシーンの列強軍隊の威風堂々入城の場面では、しんがりで日本軍も登場する。しかし日本軍については、他の列強軍隊に比べて明らかに数段格下げされた描写がされていた。中学生だった私は、格下げされた描写しかしてもらえない日本の姿をなさげなく思った。その感情は直に映画に横溢している「欧米礼賛・アジア蔑視」への腹立ちに転じた。主人公は最後にこう言う。「（それまで中国での利権を巡って争っていた欧米列国の部隊が）、団結して戦った。これは大切な教訓として残るぞ。」このセリフに対して、「何言ってるんだ、こいつ!」という反感を抱き、それは私の心の中における「傲慢な米国像」の起点となってしまった。

<sup>1</sup> Yahoo の本件映画欄 <http://movies.yahoo.com/shop?d=hv&cf=info&id=1808529407&intl=us>

### 【対ムスリム籠城戦:「エルシド」】

1961年の「エルシド」もチャールトン・ヘストン主演の映画で、私はやはりTV「日曜洋画劇場」で見た。11世紀、イスラム・ムーア人の支配下にあったスペイン王国によるレコンキスタ(祖国回復戦争)を舞台にしている。エルシドはスペインの貴族の勇将であるが、王位継承の争いに巻き込まれて、追放される。しかしレコンキスタの戦いで、イスラム・ムーア人の攻勢の前に王国は窮地に陥る。エルシドはスペイン王国存亡の危機を救うために再び戦うというストーリーである。

映画後半の見せ場は、イスラム・ムーア人の大軍に包囲されたスペインの籠城戦である。エルシドは幾度か敵の攻撃を跳ね返すが、最後に敵の矢を胸に受けて瀕死の重傷を負い、城内に退却する。城の外ではイスラムの軍勢はエルシドが姿を現さないで、死んだかもしれないと勢いづく。このままでは味方の軍勢も戦意を低下させて総崩れになるかもしれない。死の床でエルシドは言い残す。「我に甲冑を着せ、馬に括りつけ、生きているがごとくあらしめよ。」こうして、ラストシーンでエルシドは再び颯爽と登場。エルシドが死んだと思っていたイスラムの軍勢は恐れ慄き、味方の軍勢は勢いを取り戻し、戦況はスペイン王国の勝利へと転じる。

死んだエルシドが甲冑姿で馬上に固定され、敵前に登場、敵のイスラム兵が慄き慌てふためくラストシーンが、陳腐で茶番だった。しかしそれ以上に、やはりこの映画でも、スペイン・キリスト教徒の登場人物は個性豊かに描かれている一方で、イスラム・ムーア人の軍勢は非個人的な烏合の衆としてしか描かれていない。あきれる程の「自文化びいき歴史観」で出来上がっている。なるほど、チャールトン・ヘストンはアメリカ・ハリウッド黄金時代の単純で傲慢な時代的雰囲気を実現した役者だった。

同じ時期に製作されたイギリス映画「アラビアのロレンス」(1962年)に比べると、上記2つのアメリカ製「歴史大作」に表れた歴史観の単純、幼稚さは際立っている。イスラム圏を含む異文化との関わりにおいて、イギリスに比べて米国が歴史的に未熟であることの反映かもしれない。

### 【こういう映画を待っていた！ “Kingdom of Heaven”】

前置きが長くなったが、“Kingdom of Heaven”は期待を超える素晴らしい映画だ。時は1184年、主人公ベリアン(役、オルランド・ブルーム)はフランスの鍛冶屋(blacksmith)で、女房と子供を失い、鬱々としていた。そこに1次と2次の十字軍で武功を重ねた老騎士がベリアンを十字軍遠征に誘う。ベリアンは一旦断るが、その直後、女房の死に係わった司祭を衝動的に殺害してしまい、追っ手を逃れて、老騎士の十字軍に参加する。老騎士も息子を失っていた。彼は実の息子のようにベリアンに目をかけ、剣術を教える。

途中、主人公を捕縛しようとする追っ手との戦いで老騎士はベリアンをかばって負傷し、エルサレムまでの旅の途中で死の床につく。死の前にベリアンを自分の息子と呼び、騎士としての洗礼を行い、自分の指輪と剣を渡して、言い残す。「エルサレムの王を守ってくれ。もし王が逝ってしまったならば、エルサレムの人々を守ってくれ。」こうして主人公は老騎士の形見の剣を携えて苦難の末にエルサレムに辿り着く。

エルサレムは第1次の十字軍遠征でキリスト教徒の支配下に入り、エルサレム国王(キリスト教徒)が統治していたが、クリスチャン、ムスリム、ユダヤ人が共存していた。死んだ老騎士は第1次と第2次十字軍遠征で武功を重ね、エルサレムでは広く名を知られた領主だった。主人公は老騎士の後継者として受け入れられ、次第に頭角を現す。エルサレム国王はイスラム教徒との平和共存策を採り、イスラム教徒を殺害したキリスト教徒は死罪とされた。しかし国王は不治の皮膚病に犯され、余命は長くない。国王の美しいプリンセスは有力領主のギイの妻となっており、ギイが次期国王の地位を約束されている。しかしプリンセスはベリアンとの恋に落ちる。

貪欲で好戦的なギイは現国王のイスラムとの平和共存策に不満で、配下の重鎮とつるんで、イスラム商隊を殺戮、略奪する。これに怒った地元のムスリム有力者の要請で、イスラムの王サラハディーンは大軍勢を率いて、エルサレムに向けて進撃。戦争を回避するためにエルサレム国王は、病の身体でキリスト騎士団を率いて、サラハディーンの軍勢と対峙し、トップ交渉で事件の責任者の処罰と和平を約束する。サラハディーンは義を重んじる王で、病のエルサレム王に自分の医者を遣わそうと約束して分かれる。

しかし間もなく国王は病に倒れ、プリンセスはクイーンとなり、ギイがその夫として王位に着く。対イスラム排撃主義でキリスト教徒騎士団の力を過信するギイの意を受けた領主が、サラハディーンの妹の住む村を急襲し、妹を殺害してしまう。怒ったサラハディーンはエルサレムに使者を送り、妹の亡骸の引渡しとエルサレムの明け渡しを要求する。新国王ギイはサラハディーンの使者を切り捨て、騎士団を率いてイスラムの軍勢に戦いを挑む。無謀で好戦的な企てに反対する主人公はエルサレムに残る。結局、砂漠の遠征で疲労した騎士団はサラハディーンの大軍によってあっけなく壊滅され、ギイも捕縛されてしまう。ギイの騎士団を壊滅させたサラハディーンの軍隊は、そのまま進軍し、エルサレムを包囲する。こうして主人公とエルサレムの残されたキリスト教徒住民の籠城戦が始まった。幾つもの印象的なシーンがある。記憶による再現なので、セリフなどは意識で不正確かもしれないが、幾つか紹介しよう。

#### 【ムスリムの恩義】

エルサレムに到着した後、初めてイスラムの部隊と交戦した主人公は戦闘に破れる。倒れたベリアンに剣が振り下ろされるが、剣は身体を突かず、地面を刺した。見上げるとエルサレムへの旅の途中の戦闘で主人公が命を助けたムスリムが立っていた。彼はサラハディーンの軍勢の隊長だったのだ。命の借りを返したムスリムの隊長はサラハディーンの大軍を相手にキリスト教騎士団の勝ち目はないと諭す。

#### 【大きな災いを防ぐための小さな罪】

死の床でエルサレム国王はベリアンを呼んでこう言う。「自分が死ねばプリンセスの夫であるギイが国王になり、イスラム教徒相手に戦争を始めるだろう。それを回避するためには、君が娘(プリンセス)と結婚して王位を継承して欲しい。娘もそれを望んでいる。ギイを暗殺するのだ。」しかし暗殺を企て、王位に着くことなど望んでいないとベリアンは断る。プリンセスはベリアンを恨んで言う。「あなたは大きな災いを防ぐために小さな罪が時には必要だってことが判ってないのよ！」プリンセスの懸念は現実となる。

#### 【騎士の洗礼】

ギイの率いる騎士団が壊滅し、不安に慄くエルサレムの住民を鼓舞して籠城戦の準備をするベリアンに司祭が言う。「籠城しても勝ち目はない。我々だけで逃げ出そう。」そんなことはできないと答えるベリアンに司祭が問う。「騎士団なしで勝てるはずがないだろう！どうする気だ。」ベリアンは鍛冶屋だった自分に騎士の洗礼を施した老騎士を思い出したのだろう。不安げな人々に向かって言う。「判った。戦う意思のある者は皆、そこにひざまずけ！」そして全員に騎士としての洗礼を施してしまう。教会の司祭は「にわか騎士で戦えるはずがない」と困惑するが、「騎士」となった住民達は意気揚々である。

#### 【「予言」となった老騎士の遺言】

ギイが率いたキリスト教徒騎士団がサラハディーンの軍隊に敗れ、騎士達の累々たる屍が砂漠を覆い尽くした。その現場を見て、ベリアンはエルサレム王国に滅亡の時が迫っていることを知る。おそらくこの時、彼は自分の使命が、残されたエルサレムのキリスト教徒住民を救うために戦うことだと確信したのであろう。老騎士の遺言が予言となり、その成就が問われる時が来たのだ。

いよいよサラハディーンへの攻撃が始まろうとする前日、主人公は決起の演説で語る。「我々が守るのは、石でできたエルサレムの王宮でも教会でもない。我々の家族、住民を守るために戦おう。」これを聞いて教会の司祭は口を挟もうとする。おそらく、「教会と王国を守るのがキリスト教徒の使命だ」とでも言いたかったのであろう。しかし相手にされない。その後、エルサレム王国の滅亡が確実になり、悲嘆するクイーンに(元プリンセス)にベリアンは語る。「“Kingdom of Heaven”は我々の心の内にあるのではないのか。」

【「それが判らないならば、我々の神ではない」】

サラハディーンへの攻撃はすさまじい。巨大な投石機で爆裂する火の塊をエルサレム城内に無数に打ち込む。エルサレム側は最初無反撃でこれに耐え、敵軍が事前に計測された射程近距離に入ってから、投石器で反撃して打撃を与える。次にイスラム軍勢は城砦攻略用の移動式の塔を城壁に近接させ、城内に乗り込もうとする、迎え撃つエルサレム勢は、敵兵に油を浴びせ、火を放ち、必死の防戦を展開する。城内ではプリンセスが髪を切り、次々と運び込まれる負傷者の手当てに従事する。一連の戦いが終わると双方におびただしい数の死者が生じた。予想を越える数の兵士を失ったサラハディーンは死者を埋葬し涙する。一方エルサレム城内では、死者の山を放置すれば、衛生状態が悪化する。主人公は大きな穴を掘り、火葬を命じる。火葬はキリスト教徒にはタブーである。またしても司祭は、「神の加護を得られなくなる」と言って反対するが、主人公は「我々が生き延びるために必要なことだと神も判ってくださるはずだ。それで神の加護が得られないようなら、それは我々の神ではない」と言って司祭を退ける。

【「私はサラ・ハ・ディーンだ」】

とうとう、城壁の一角が破壊され、破壊口でイスラム兵とキリスト兵の白兵肉弾戦となる。しかし、双方多数の死傷者を出して、決着しない。夜になって戦闘が休止する。サラハディーンは数で圧倒的であり、力まかせに攻め続けることもできたであろう。しかし予想をはるかに超えたエルサレムの防戦振りに、よほどの人物が指揮をしているのだらうと思い、サラハディーンは敵将に会ってみたくなったようだ。翌日、イスラムの使者が交渉を申し込んで来た。交渉の場で、サラハディーンと主人公が対峙する。サラハディーンは敵将ベリアンがかつて幾度も自分と戦い交えた老騎士の後継者であることを知る。「降伏してエルサレムを明け渡すならば、兵士と住民全ての命を保障し、港までの無事の移動を約束しよう」と言う。ベリアンは「その言葉に違いはないな？」という趣旨の問いを発する。それに対して、「私はそういう連中とは違う。私は、サラ・ハ・ディーンだ」と答えるイスラムの王の目は誇りと自信に満ちていた。この結末は、史実に照らすと、もしかしたら美化し過ぎかもしれないが、歴史映画としては許される範囲の虚構であろう。

和平交渉が成立して自軍に戻るサラハディーンにベリアンが問う。「最後に聞かせてくれ。あなたにとってエルサレムとは何なのだ？」おそらく、サラハディーンにとってエルサレムは“Kingdom of Heaven”なのか？と尋ねたかったのではなかろうか。サラハディーンはベリアンの心の内を見透かしたかのようにそっけなく“Nothing”と答えた後、ニッと笑って言う。“...Everything” この禅問答のようなサラハディーンという言葉は何を意味しているのか？ 私には解釈があるが、この映画を見た他の人と謎解き会話を楽しむために、ここでは述べないでおく。

【役者オランダ・ブルーム】

主演のオランダ・ブルームは“The Lord of the Rings”シリーズで神秘的な雰囲気漂わせたエルフの王子役だった。映画“Troy”ではギリシアの美女ヘレナと恋に落ちる甘いマスクのトロイの弟王子役だった。今回は一転、タフで男臭い役柄の主人公である。その役柄の変幻自在はたいしたものだ。女性の最人気男優だそう。これからも活躍するだろうが、“Kingdom of Heaven”がブルーム主演の代表作として残ることは間違いないと私は思う。

“The Lord of the Rings”で思い出したが、ご愛読を頂いている方の一人から、この映画についても論評を書いてくれと言われたことがあるが、とうとう私は書く気になれなかった。ひとつの理由は私が原作を読んでいないことである。もうひとつの理由は、この映画が描いている壮大な戦いが魔獣軍団と人間＋エルフ連合の戦いであることだ。見かけは複雑に入り組んだストーリー構成の基底に、単純で平板な「正義と邪悪の闘争：善悪史観」を感じてしまって、私はこの映画に魅了されることはなかった。

#### 【映画文化の成熟と政治の貧困】

言葉を重ねる必要はないかもしれないが、対峙・戦闘した双方の異文化の人物をこの映画は個性豊かに描いている。キリスト教徒のみでなく、イスラムの王も隊長も、誇りと義のある人物として魅力的に描かれている。対峙する敵は決して The Evil (悪)でもなく、味方が必ずしも善という訳でもない。キリスト教徒サイドにいる好戦的な騎士ギイやその共謀者のイスラム住民に対する略奪・殺戮も描かれている。要するに敵と味方に分かれ、文化が異なっても、双方ともに善人も悪人もいるのが人間社会なのだという当然の視点で描かれている。

11世紀末に始まり約2世紀近く繰り返された十字軍遠征が、「聖地エルサレムの奪還」という宗教的な大義名分から外れて、目的違いの略奪や政治的な思惑に利用されたことは日本では高校生の歴史でも習うことだ。この映画はそうした史実を織り込んで映像化されている。

「北京の55日」や「エルシド」は、中国人やイスラムの人々には見るに耐えない「文化的な差別映画」であろう。しかし“Kingdom of Heaven”ならイスラムの人々も受け入れられるのではなかろうか？ 子供は自分の視点でしか他人を見るができない。他者の視点に立つと、世界や自分自身がどのように見えるかを想像、推測できるのは社会的な訓練を経た大人だけである。同様に自文化の尺度でしか異文化を見るができないことを、文化的な幼稚性、未成熟と呼んでもいいだろう。単純で平板な「自国・自文化びいき歴史観」が文化的な未成熟の産物ならば、異文化に対する公平な理解と寛容に基づいた一種の相対史観は文化的な成熟の産物である。「北京の55日」「エルシド」から“Kingdom of Heaven”まで40年間かけて米国の映画文化の最良の部分(あくまでも最良部分のみだが)は、そうした歴史映画を産み出す高みに到達したのだ。

深刻な問題は、米国の政治がこの映画文化の高みに未だ追い付いていないことかもしれない。

以上